

砥部焼

砥部風磁器の誕生

矢野 徹志（里山人）

愛媛産には、愛がある。



白磁に呉須染付。堅牢で、斬新、手作りの味をたたえた砥部焼の食器たち。

土と炎と陶工たちの織り成す砥部焼誕生のドラマを演じてきた焼き物の里。砥部はいまだ手作り。時が育んだ人肌の手仕事。観て、創って、買って、遊んで、アートの里。砥部は出会いの里。和みの里。アートの里。感動の里。そして焼き物の里。

毎年四月の第三週の土・日曜日。砥部の地は、愛媛の春の風物詩ともなった砥部焼まつりに沸き返る。九十をこす窯元から出展される十五万点を超える焼き物を求めて、中国から十万人にも及ぶ砥部焼ファンが押し寄せる。お目当ては、暮らしに安らぎと潤いを与えてくれる美しい暮らしの器たちだ。ちよつと厚手

な白磁の器に映える、軽快な筆さばきの草花や唐草模様の斬新な藍色の呉須染め付け。さつと彫りを施した青白磁釉の涼やかな花器たち。素朴、堅牢、そして手作りの味が人氣の秘密。普段使いの器たちでも、一つひとつ陶工たちの心がこもる。くらわんか茶碗・湯呑み・井・皿等の日用雑器に、コーヒール・箸置き、ブローチなどの小物類。花器に大型の壺。平成十五年現在窯元総数は約百軒。窯業従業者は五百人を超える、年商二十億円の重要産業だ。

砥部焼が全国的なファンに支えられるようになるのは昭和四十年代の、民芸ブームが背景にあった。それは、大正期から続けられてきた柳宗悦



陶工たちの祭典、砥部焼まつり風景。

らの民芸運動の成果とも言える。東南アジアや中国方面への販路拡大の輸出一辺倒に傾いていた砥部。鮮やかなコバルト染付による、型もの中心の量産主義の製品は、戦争に突入して行く時代の不況のありを受けて、販路を断たれ、国内向けの販路も失って、混乱期に入る。

戦後も、量産化時代の体質から脱皮できず、その行き先を決めかねていた昭和二十八年。民芸運動の推進者柳宗悦、バーナード・リーチ、その後、浜田庄司、富本憲吉、鈴木繁男らの来砥があり、彼らの助言をえて、磁器本来の白さと手作りの味を生かした江戸期の呉須染付の食器の伝統に帰る事への示唆を受ける。機械化と規格化の波に乗り遅れ、素朴な半農半陶で行く末を見失っていた砥部にこそ、民芸運動の可能性が眠っていた。

「手仕事の磁器の仕事。磁器産地には食器がふさわしい。」柳らの進言に、砥部の体質改善が模索される。型刷り中心

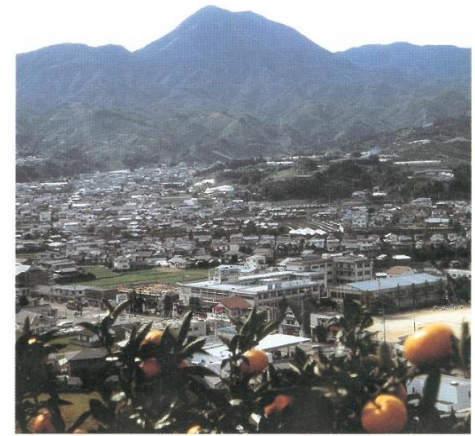
の作業で、絵筆をもつという染め付けの伝統を失いかけていた窯場に染め付け呉須の食器が蘇ることになる。

その思想は、昭和三十年代から、氣鋭の酒井芳人、工藤省治らの若手陶工たちの「陶和会」によって受け継がれ、デザインと技術の研鑽が花開いてくる。そこへ昭和四十年代の、高度成長時代がもたらせた都市化と画一化。人々は、民芸ブームやふるさと自然に、暮らしの活路を見いだす。ぼつてりとした手作りの白磁の器に、江戸期の呉須染め付け

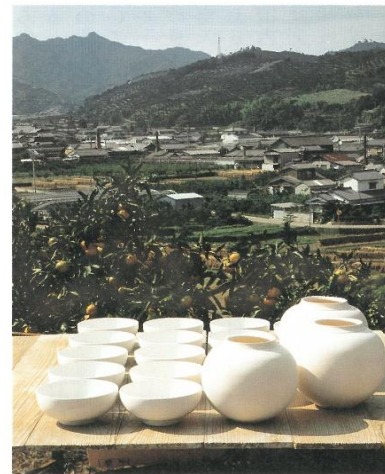


陶芸創作館で給付を楽しむ人々。家族つれやグループが砥部焼体験。

ミカンが薫る砥部焼の里。障子山を望む自然に恵まれた陶源郷。松山から車で30分。



の伝統が、現代の砥部風磁器となつて蘇りをみせるのである。昭和五十一年には、国の伝統工芸品の指定を受けて、地元の陶石原料を活かした手作りの作品に、白磁、染め付け、青磁、天目（鉄釉）の四種の技法が、砥部焼の伝統的技法として認定され、実用性や現代性を兼ね備えたデザインと、手仕事の産地として独自の砥部様式は定着を見せるのである。



遠景に砥石山がみえる五本松地区。乾燥をまてて天日干しをしたつくりだちの器の風情がのどか。

る。一方、翌年の昭和五十二年に伝統産業都市に認定されると、陶祖の丘周辺から砥部焼の里の整備が急速に進み、陶芸創作館や、陶板のみち整備事業が始まり、安永六年以来の砥部焼の磁器創業二百年祭も盛大に開催された。一方、平成元年に砥部焼伝統産業会館が建設され、地場産業の拠点となつて、古砥部から現代にいたる砥部焼の歴史と現在に触れることもできる。そのほか、砥部焼直売所や、観光

センター、梅山窯や砥部焼窯業団地（陶里が丘）や小売店の見学を兼ね、焼き物を買求める観光客の姿も目立ち始める。近年、陶工たちの挑戦は、食器の分野ばかりでなく、アクセサリー、室内装飾用陶板、陶製ランブシェード等にも及び、松山空港前の巨大陶製モニュメント、ジュネーブ国連欧州本部にある地球儀のモニュメント。さらには、現在建設中の県武道館へのデザイン陶壁等、都市空間プロジェクト

トへ積極的に参入する大掛かりで意欲的な作品への取り組みもみられる。このような、砥部焼の原点は、一かたまりの砥石屑にあつた。一砥部磁器史（上）（山本典男著）によつて少し、歴史の分野にもまぎしを向けておこう。

砥部の地名は、もともと砥石を産する土地の名に由来する。外山の砥石は伊予砥として早くから知られ、天平十九年（七四七）の正倉院文書にもその名が見える。江戸期になつて、その砥石屑が砥部磁器創業の出発点になつた。

砥部の砥石を扱つていた大坂淡路町の砥石問屋和泉屋治兵衛から、磁器の先進地肥前天草の砥石屑が焼き物に使われていることを知ることとなつた大洲藩は、それまで捨てていた砥石



川登佐川製陶所に一基だけ残る水車小屋。

屑を有効利用した磁器の開発を決断。麻生村の門田金次を企業主幹とし、直接監督には原町村の杉野丈助を当て、和泉屋の斡旋により、肥前大村藩から、五人の陶工を雇い入れ、安永四年（一七七五）三月五本松の上原窯で焼成に着手する。結果は失敗し、陶工たちは失望帰国してしまふ。翌年、再度挑戦。釉薬が溶けず、試みはまた失敗。たまたま、筑前上須恵よりきていた信吉から、失敗の原因は釉薬にあることを教えられる。翌安永六年（一七七七）筑前の釉石を使ったところ、外山砥石が磁器となつて生まれ変わり、焼成は成功する。これが砥部磁器創業の最初となつた。

砥部磁器発展の礎を築くことになる。現在の砥部焼の陶石は上尾峠（広田村）のものが使用されているが、文政元年（一八一八）に、向井源治が発見した川登陶石が使われた。そのため、水車が川澄地区から砥部川沿いに集中、陶石を砕いた。明治期には、その数、二十四基にも及んだという。今は、川登の佐川製陶所に一基だけ残り砥部焼の歴史を物語る貴重な姿をとどめている。

やの・てし（里山）ミユゼ里山房主宰、昭和十五年愛媛県宇摩郡土居町生まれ、愛媛大学教育学部美術科卒業後、県立美術館学芸員を経て、松山南高砥部分校デザイン科教師、退職、アートをテーマとする地域文化向上にむけて、ミユゼ里山房を設立、アートの里づくり会議代表、砥部国際アートクラブ副会長。全国陶芸展委員、画家。南海放送学芸美術鑑賞講座講師。南海放送ラジオ番組「里山のおしやべり美術館」パーソナリティ。著書に「愛媛近世画人列伝」（文化振興財団）「愛媛の戦前の洋画研究」（県美術館図録）他。松本山重研究を継続中。